

東北 A 県南地域における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究 ——高校生の海外への関心と国際的な活動に関する意識調査——

山野内 靖子 久保 宣子 蛭田 由美

要旨

高校生の海外経験や関心について調査し、国際的活動や大学教育の国際看護学に対する期待を明らかにすることを目的とした。高校生を対象とした自記式質問紙調査により 981 名の回答が得られた。高校生の海外渡航の経験者は約 1 割であり、スポーツや部活動を通じての海外経験の渡航先・海外生活は多様であった。国際協力に関わる活動よりも生活や芸術文化への関心度が高い傾向にあり、海外研修への要望はスポーツ交流、現地の人や学生との交流、国際協力活動の見学、ホームステイなどであった。渡航経験と海外への関心との関連は示されなかったが、将来の自己像を構築しようとする前向きな生徒の存在が明らかとなった。国際社会に貢献したいという思いを大切に育む早期の教育が必要である。

キーワード：国際看護 国際活動 意識調査 高校生

I. はじめに

高校生をはじめ若者の海外に関する経験は将来の職業人としての視野を広げ、国際的な活動につながることを期待されている。これまで著者らは、国内外において加速するグローバル化に対応する医療者を育成するために、看護の基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究に取り組んできた¹⁾²⁾。国際保健医療の対象や問題は、いつも同じように固定しているわけではなく、刻々と変化していると言われている³⁾。国内の 18 歳未満の人口が減少する一方で、来日外国人が増え続け、多国籍の人々のヘルスケアの需要が増し、提供者の育成が急務となっている³⁾。特に、東北の A 県南地域においては米軍基地、近隣の国際交流の様々な場や医療施設があり、国際協力とともにグローバル社会で活躍する人材が求められる。

看護教育の役割としては、国内外を問わず世界の人々が置かれている生活や健康の現状を理解し、国際的な看護活動を展開できるような看護職者を育てることが重要である。文

部科学省は、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」⁴⁾において国際社会・多様な文化における看護職の役割を示している。全国の看護師等学校養成所では大学・短期大学・専門学校それぞれに教育課程の中に「国際看護学」関連の教科目を位置付けて授業を展開している。本学においても、地域の特性を活かし、急速な国際社会への動向に沿う国際看護学の教育プログラムを検討している。

国際看護学の教育現状に関する研究では、看護教育における国際看護を担う人材育成およびコンピテンシーモデルの構築や開発は試行錯誤の段階であった¹⁾。また、全国の大学看護学科における国際看護学教育の教育現状としては、調査校の約 6 割で海外研修が実施され、意欲的に参加した学生の成長や高い学習効果を得ており、海外での経験を支援する必要性が示された²⁾。高校生においては、国際理解の教育実践例から異文化の受容と国際化に繋がったこと⁵⁾、高校時代の短期海外研修旅行の経験が長期にわたり異文化の見方に

影響を与え、学習意欲の向上や職業選択の要因となるとの報告がある⁶⁾。

近年、グローバル人材育成に向けて早期の教育的介入と多彩な試みが必要とされるなか、高校生の海外活動や国際看護学への期待と要望についての報告はない。豊かな情報社会に生まれ育つ若者らは、海外事情や世界の人々の健康について多様な情報を入手しやすい環境にある。また、グローバル社会への関心度と、海外に関する経験は関係するのではないかと考える。これらの現状を踏まえ、医療者を目指す学生の国際性を高める教育を提供するために、若い世代の海外渡航や将来の国際協力活動へつながる海外への関心やイメージを探る必要がある。また、高校生は職業選択および自己の将来像を獲得しようとする時期にあることから、国際性や海外へのイメージの現状を把握することは、今後の大学教育や国際性豊かな医療者を育てるための基礎資料となるだろう。今回、高校生の海外経験および海外への関心やイメージの特徴、さらには国際協力活動への認識や高校生の社会貢献を目指す期待を明らかにできたので報告する。

II. 研究目的

高校生の海外に関わる経験や、国際協力活動の関心と期待の現状を明らかにし、A県内における国際看護学の教育プログラムの開発に役立てることを目的としている。

III. 対象および方法

1. 対象

A県B高校に在籍する1年生から3年生、全学年の高校生とした。

2. 調査月日 平成28年7月～8月

3. 調査方法

自記式質問紙法、当該高校生を対象とし調査の趣旨について説明し協力を求めた。一斉に教室における依頼・配布を行った。

調査内容は、高校生の国際協力活動に関する認識や期待として、海外に関する経験と外国語の学習経験、海外への関心と期待、海外研修への意識、海外活動への将来的な希望、基本属性についてであった。

4. 分析方法

分析はIBM SPSS Statistics ver.19.0を使用し、記述統計量を算出した。クロス集計および独立性の検定を行い、関連性について検討した。有意確率は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

調査の協力校である学校長の許可と内諾を得ると共に、八戸学院大学・八戸学院短期大学部研究倫理委員会からの承認を得た(15-21)。

IV. 結果

1. 属性

A県内B高校の在籍学生1018名に調査用紙を配布し、回収部数は1004部(98.62%)、そのなかの欠損値の多いものを除外し981名の回答(96.37%)を分析対象とした。高校1年生は305名(31.09%)、2年生は333名(33.94%)、3年生は343名(34.96%)であった。男子生徒は503名(51.27%)、女子生徒は478名(48.72%)であった。出身地はA県内が814名(82.98%)、他県が148名(15.09%)、不明19名(1.94%)であった(表1)。

2. 海外に関する経験

海外に関する経験として、渡航経験を質問した。海外に行った経験がある80名(8.2%)、経験がない901名(91.8%)であった。学年ごとの差はなかったが、渡航経験は女子生徒より男子生徒が有意に多かった($p < 0.01$)(表2)。また、A県内学生より他県出身の生徒の渡航経験が有意に高かった($p < 0.05$)(表3)。渡航経験の内容については、長期の滞在による海外生活が20名(1.99%)であり、最短1週間、最長3年間であった。その海外滞目的は、野球、ホームステイ、親の実家、などであった。

海外生活をした国名はアメリカ 5 名、韓国 5 名、台湾 4 名、オーストラリア 2 名、フィリピンと中国が 1 名であった。また、海外旅行は 53 名(5.28%)であり、旅行先はアメリカ 17 名、韓国 10 名、タイとハワイ 7 名、中国、グアム、カナダ、シンガポールなどであった。

3. 外国語の学習経験

外国語の学習経験として、外国語(英語)の会話力への自己評価を 4 段階(良く話せる、少し話せる、あまり話せない、全く話せない)で回答を得た。全体の良く話せるは 12 名(1.2%)、少し話せる 130 名(12.94%)、あまり話せない 404 名(40.24%)、全く話せない 407 名(40.54%)であった。語学力の自己評価の学年別では 3 年生より 1 年生が良く話せると少し話せる人が多い傾向にあった。

授業以外の外国語を学ぶ機会に関する質問では、機会がある 76 名(7.57%)、機会がない 828 名(82.47%)、学習の機会が欲しいと答えたのが 85 名(8.47%)であった。授業以外で学習している外国語は、英語(27.98%)、その他(2.49%)であり、内訳は韓国語、ドイツ語、ポルトガル語であった。

4. 海外への関心と期待

高校生の海外への関心事として、10 項目の選択肢の中から複数回答を求めた(図 1)。回答が多かった順に、「社会・経済・教育・文化的な違い」779(18.3%)、「世界の人々の生活の現状」778(18.28%)、「国際協力における日本の貢献」580(13.62%)、「先進的な医療システム」462(10.85%)、「世界の人々の生活の現状」778(18.28%)、「国際協力に関係する機関の活動」393(9.23%)、「世界の中で日本の専門職者の協力の現状」295(6.93%)、「国際協力を行う上で専門職者に必要とされる能力」294(6.91%)、「国際協力活動に参加するための方法」210(4.93%)であった。その他 26(0.61%)では、自由記述として「食文化・食生活の違い」、

「歌、音楽」、「スポーツ」、「難民問題」「格差問題」、「戦争について」、「自然・心理」などが挙げられた。

5. 期待する海外に関する授業の内容

海外についての授業を受けるとしたら、どのような内容を期待するかの設問に対し、選択肢の項目から複数回答を求めた(図 2)。多かった順に、「世界の子ども健康と環境」703(70.02%)、「紛争や難民と健康問題」617(61.45%)、「貧困と教育と健康の格差」530(52.79%)、「日本に住んでいる外国人の医療・支援」495(49.3%)、「地震・津波等の自然災害時の緊急支援」495(49.31%)、「感染症とその流行と予防」469(10.75%)、「医療技術・システム」359(8.23%)、「経済の開発・産業発展と環境・健康問題」343(7.87%)、「世界における出産や妊婦死亡について」が 326(7.47%)であった。その他の 24(0.55%)の自由記述では、「スポーツビジネス」、「食文化の違い」、「ハリウッドやオスカー」、「過去の戦争の詳しい内容」などが挙げられた。

6. 海外研修への意識

A 県内の C 大学が主催する海外研修への高校生の認知度を確認した。C 大学の海外研修を知っている 63 名(6.47%)、知らない 918 名(92.73%)であった。その海外研修への関心がある 147 名(14.98%)、関心がない 542 名(55.25%)、どちらとも言えない 292 名(29.77%)であった。また、海外研修への参加希望についての質問へは、参加を希望する 205 名(20.52%)、希望しない 527 名(54.59%)、どちらとも言えない 249 名(29.38%)であった。海外渡航の経験の有無と海外研修への関心の連関関係は見られなかった($p > 0.05$)。

希望する海外研修の内容としては、図 3 に示す選択項目から複数回答を求めた。スポーツ交流が 592(14.95%)、現地の人や学生との交流 589(14.87%)、国際協力についての訪問・見

学が 465(11.74%)、ホームステイ 453(11.43%)、専門的な施設における実習 416(10.5%)、語学研修 410(10.35%)、その国の文化に関わる体験 388(9.8%)、ボランティア活動 337(8.51%)、訪問する国の事情に関する説明 299(7.55%)、その他 12(0.3%)であった。

海外研修への希望としての自由記述では、「広い視野を持ちたい」「人間として成長できる」「困っている人を助けてたい」「海外の文化を知りたい」「語学力を高めたい」「他国に興味がある」など「行ってみたい」の回答と、「お金がかかる」「興味がない」「わからないから不安」「テロが怖い」などの回答が得られた。複数回答としては「行ってみたい」29名(2.96%)、「興味がある」12名(1.22%)、「お金がかかる」21名(2.14%)、「興味がない」41名(41.79%)、「不安」19名(1.94%)、「テロ・紛争」12名(1.22%)であり、その他、個別的内容が挙げられた。海外研修の希望国は 796 名の回答があり、アメリカ 625名(78.51%)、韓国 39名(0.4%)、タイ 31名(0.3%)、イタリア、フランス、イギリス、カナダなどが挙げられた。

海外研修で身につけたい(学びたい)内容についての質問では、453名(46.18%)の回答を得た。主な内容としては、英語力・語学が 200名(44.15%)、文化 116名(25.60%)、コミュニケーション 48名(10.6%)、日本との違い 47名(10.38%)、その他としては生活、交流、スポーツ、医療などが挙げられた。

7. 海外活動への将来的な希望

海外活動への将来的な希望として、海外での国際交流や活動を希望するかを質問した。将来的に海外での国際交流や活動を希望するが 46名(7.57%)、希望しない 545名(54.28%)、どちらとも言えない 362名(36.06%)であった。海外活動を希望する生徒と海外渡航経験との検定では、連関がみられなかった($p > 0.05$)。希望する国名として、71名(7.10%)が回答し、最も多いのはアメリカ 30名、韓国 15名、イギ

リス 7名、ドイツやフランスが 3名、他はイタリア、ニュージーランドであった。

将来的に希望する海外活動の内容としては、53名(5.23%)が回答し、主な内容ではスポーツ、看護、医療・病院、ホームステイ、交流、語学、その他の内容であった。

V. 考察

本調査の目的は、高校生の海外に関わる経験と国際協力活動の関心および期待の現状を明らかにすることであった。調査の協力を得た高校生は、東北地方の A 県の県南地方の私立高校に通学する生徒であった。

1. 高校生の海外に関わる経験

高校生の海外渡航の経験としては、海外生活や海外旅行の経験者が約 1 割であった。海外渡航の内容は、スポーツや部活動を通じて海外に関わる経験として男子生徒が多く、海外生活を体験する生徒もあり渡航先は多様であった。

外国語の会話力への自己評価は、「良く話せる」「少し話せる」の群を合わせて 14%ほどであり、9 割近くの高校生は外国語の会話に自信がないと回答したが、1 年生が 3 年生より高い自己評価を示した点では、近年の小中学校での英語教育の成果とも考えられる。また、学校の授業以外に外国語を学ぶ機会や時間をもつ生徒が 1 割、外国語を学ぶ機会が欲しい生徒が 1 割存在することから、英語以外の語学への関心も高いことが明らかになった。小林ら⁷⁾の報告によると、学生の留学意識低下の原因を探った結果、英語が苦手、自信が持てないなど「英語」が障害となっていると述べていた。また、日本の「高校生の留学の最大の目的は語学の習得である」⁹⁾との報告があるが、今回の生徒はスポーツや音楽を通じた交流を経験していることから、語学には自信ないが多様な文化や生活に興味や関心が高いことが、自由記述より伺えた。

2. 国際協力活動への関心と期待

海外への関心と期待では、「社会・経済・教育・文化的な違い」や「世界の人々の生活」を選択した高校生が多く、自由記述においても「食文化・食生活の違い」「歌、音楽」「スポーツ」「難民問題」など海外での国際協力に関わる活動よりも、生活や文化的なものへの関心度が高い傾向にあった。高校生として興味を持つ海外のスポーツ選手やミュージシャンなどへの強い関心が、海外への理解や関心につながっている可能性がある。

国際看護学に関する授業内容への期待で多かったのは、「世界の子どもの健康と環境」「紛争や難民と健康問題」「貧困と教育と健康の格差」「日本に住んでいる外国人の医療・支援」「地震・津波等の自然災害時の緊急支援」であった。吉永らは、大学生の国際保健・国際看護のイメージに関する意識調査から、日本学生は他国より発展途上国への国際支援や協力をイメージしていることを明らかにしている⁸⁾。刻一刻と変化する社会情勢に伴い、若者の関心事も変化する多様化しているため、期待する授業への調査は重要である。

海外研修への関心がある生徒は 14.8%で、参加希望するが 20.52%であった。関心がないと回答したのは 5 割以上の生徒であった。参加したい理由として、「海外の文化を知りたい」「語学力を高めたい」「他国に興味がある」など「行ってみたい」前向きな回答と、「お金がかかる」「興味がない」「わからないから不安」「テロが怖い」などの回答が得られた。この結果は、海外に関するマスコミや IT 環境からの情報により、メディアで取り上げられる事件や関心事から影響を受け、受け手側としての偏りが生じている可能性が伺えた。

経済的な支援の必要性については、全国調査でも同様の結果が出ている。国立青少年教育振興機構による高校生の生活意識と留学に関する調査(2012年)では、「留学したいと思わない」という日本の高校生が 5 割強で、

米国、中国、韓国と比較し最多であったと報告した。小林らも、海外留学を希望する学生が年々減少していることを指摘し、その理由は「英語」と「お金」や「興味」の問題であり、また、海外への関心をもつ学生と全く関心をもたない学生の二極分化している可能性を述べている⁹⁾。加えて、経済協力開発機構(OECD)の報告からも、海外留学している日本人学生の割合は加盟国内で下から 2 番目であり、理由としては経済的な負担が挙げられていた。以上のように、若者の海外渡航減少が指摘されるなか、国内外の共有する文化や偏りのない情報交流が必要であり、グローバル人材育成に向けて早期動機づけとなる教育的介入と多彩な試みと経済的支援が必要とされる。

3. 現状の課題と今後の展望

豊かな情報社会に生まれ育つ青年らは、海外事情や世界の人々の生活・文化、健康情報などについて、いつでも情報を入手しやすい環境にある。そのようなグローバル化の影響は、国内にいながらも、いつでも多様な文化に触れる機会に恵まれている。しかしながら、若い世代の海外への興味や関心はあるものの、偏った情報は海外渡航や海外での国際協力活動の参加を減少させる要因になっている懸念がある。

本調査においては、海外への関心や海外研修・海外活動へ参加希望と過去の渡航経験との関係性は示されなかった。しかし、高校生として「広い視野を持ちたい」「人間として成長できる」「困っている人を助けたい」という、将来の自己像を構築しようとする前向きな生徒の存在が明らかとなった。平成 29 年「高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書」¹⁰⁾によると、日本の高校生は「社会のために役立つ生き方をすること」の割合が年々高くなっていると報告されている¹⁰⁾。本調査に協力した高い志をもつ高校生をはじめ、日本の若者

達の「社会に貢献したい」という思いを大切に育む早期の教育が必要であると考えます。

これからの国際的な看護活動は、互いの生活している文化に敬意を払いつつグローバルにどう協力していくかが重要となる。東北地方に開設された本学は、地域医療や僻地医療に貢献する看護師を育てることを教育ポリシーとして掲げている。今回の海外に関する関心や国際的な活動への意識調査から、情報社会における高校生の特徴とともに、将来への展望を抱いている貴重な若者の存在を知り、高等教育の在り方を検討できた。今後も、この地域性や文化社会情勢に合ったグローバル人材の育成を目指し、若者の新たな志向性を捉え伸ばし広げる、さらに多様な資源を活用しながら教育変革を進めていく必要がある。

VI. 結論

高校生を対象とする調査から、海外に関わる経験と関心および国際協力活動への認識として、以下のことが明らかとなった。

1) 高校生の海外生活や海外旅行の経験者は、長期滞在者も多く、スポーツや部活動を通じて海外に関わる経験であり、その海外生活や渡航先は多様であった。過去の渡航経験と海外への関心、海外研修への参加希望との関係は示されなかった。

2) 海外への関心と期待では、海外の生活や文化的なものへの関心度が高い傾向にあった。英語の授業以外の外国語の学習の機会を希望する生徒がいた。海外研修への要望は、スポーツ交流、現地人や学生との交流、国際協力についての訪問・見学、ホームステイなどであった。

東北 A 県県南地域の高校生の海外活動への展望からは、スポーツ関係や医療・看護・福祉に関わる職業人となり、将来の社会に貢献したいという思いが明らかとなり、その志を大切に育む教育が必要である。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただいた高校生の皆様、学校長、関係施設職員の皆様に心より感謝申し上げます。

研究助成

本研究は学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金)研究等補助金の助成事業を受けた「看護基礎教育における国際看護学教育の教育プログラムの開発」の一環として行った。本研究の一部は、第 37 回日本看護科学学会学術集会において発表した。

利益相反(COD)に関する開示事項はない。

引用文献

- 1) 久保宣子, 山野内靖子, 蛭田由美:文献から考察する看護基礎教育における国際看護学教育の現状. 八戸学院短期大学研究紀要, 42, 69-77, 2016.
- 2) 蛭田由美, 久保宣子, 山野内靖子:看護基礎教育における国際看護学教育プログラムの開発に関する研究-わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態-. 八戸学院大学紀要, 54, 39-54, 2017.
- 3) 文部科学省, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会資料:看護学教育モデル・コア・カリキュラム - 「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標 - 平成 29 年 10 月
- 4) 丸井英二, 森口育子, 季節子(編): 国際看護、国際保健. 弘文堂, 12-72, 2012.
- 5) 張 瓊華: 国際協力・異文化理解教育の実践に関する考察-埼玉県 A 高等学校を中心に. Educational Studies 48 International Christian University, 77-89, 2006.
- 6) 小泉隆平: 短期海外研修旅行が高校生の自我状態に及ぼす影響. 京都教育大学紀要, 121, 27-41, 2013.

- 7) 小林文, 齋藤勲, 沼澤聡 他: 薬学部 2~4 年生の海外留学と英語に関する意識調査, 昭和大学薬学雑誌, 4(2), 179-188, 2013.
- 8) 吉永清, 児玉豊彦, 小栗清佳, 他: 大学生の国際保健・国際看護のイメージに関する意識調査ー日本・台湾・フィジーにおける比較ー. 国際保健医療 26(1), 2011.
- 9) 国立青少年教育振興機構, 高校生の生活意識と留学に関する調査報告書 [概要] -日本・米国・中国・韓国の比較-平成 27 年 8 月 http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/114/2015.
- 10) 国立青少年教育振興機構, 平成 29 年高校生の勉強と生活の関する意識調査報告書 http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/114/2018.

執筆者紹介 (所属)

山野内靖子 八戸学院大学 看護学科 講師
久保 宣子 八戸学院大学 看護学科 助手
蛭田 由美 八戸学院大学 看護学科 教授

表1. 高校生の背景および海外の経験と海外研修への意識

		全体 (人数)	割合 (%)	1年生	割合 (%)	2年生	割合 (%)	3年生	割合 (%)
性別	男性	503	51.27	158	51.80	163	48.95	182	53.06
	女性	478	48.72	147	48.20	170	51.05	161	46.94
出身地	県内	814	82.98	241	79.02	288	86.49	304	88.63
	県外	148	15.09	64	20.98	45	13.51	39	11.37
	不明	19	1.94	3	0.98	2	0.6	14	4.08
海外に行った経験	海外経験有り	80	8.20	28	9.20	26	7.80	26	7.58
	海外経験無し	901	91.80	277	90.49	306	91.89	319	93.00
外国語の会話	よく話せる	12	1.20	4	1.31	7	2.10	1	0.29
	少し話せる	130	12.94	51	16.72	38	11.41	40	11.66
	あまり話せない	404	40.24	143	46.89	138	41.44	117	34.11
	全く話せない	407	40.54	98	32.13	133	39.94	168	48.98
	その他	43	4.38	9	2.95	17	5.1	17	4.96
海外研修の認知	知っている	63	6.47	17	5.57	17	5.11	29	8.45
	知らない	918	92.73	288	93.77	316	94.89	314	91.55
海外研修への関心	関心がある	147	14.98	48	15.74	54	16.22	45	13.12
	関心がない	542	55.25	153	50.16	183	54.95	206	60.06
	どちらとも言えない	292	29.77	104	33.77	96	28.83	92	26.82
海外研修への参加希望	希望する	205	20.52	62	20.32	69	20.72	74	21.57
	希望しない	527	54.59	156	51.15	178	53.45	193	56.27
	どちらとも言えない	249	29.38	87	28.52	86	25.83	76	22.16
合計		981	100	305	31.09	333	33.94	343	34.96

表2. 海外渡航の経験と性別

性別	海外渡航の経験		合計
	ある	なし	
男性	59(11.7%)	444(88.3%)	503(100%)
女性	21(4.4%)	457(50.7%)	478(100%)
合計	80(8.2%)	901(91.8%)	981(100%)

$\chi^2(df=1, N=981)=16.64 \quad \phi=0.134 \quad p<0.01$

表3. 海外渡航経験と出身地

出身地	海外渡航の経験		合計
	ある	なし	
A県内	36(4.4%)	780(95.6%)	816(100%)
県外	41(27.7%)	107(72.3%)	148(100%)
合計	77(8.0%)	887(92.0%)	964(100%)

$\chi^2(df=1, N=964)=89.32 \quad \phi=0.31 \quad p<0.01$

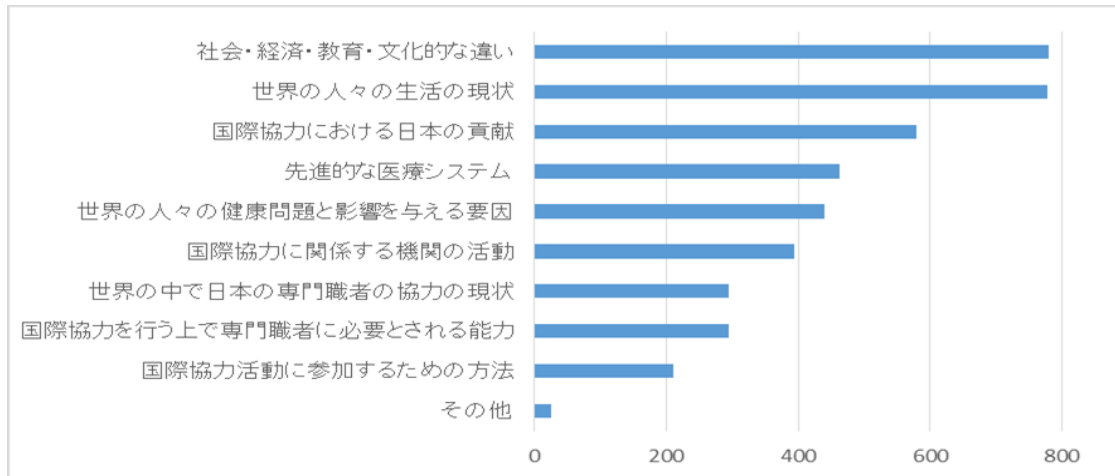


図1 高校生の海外への関心事 (複数回答) N=981

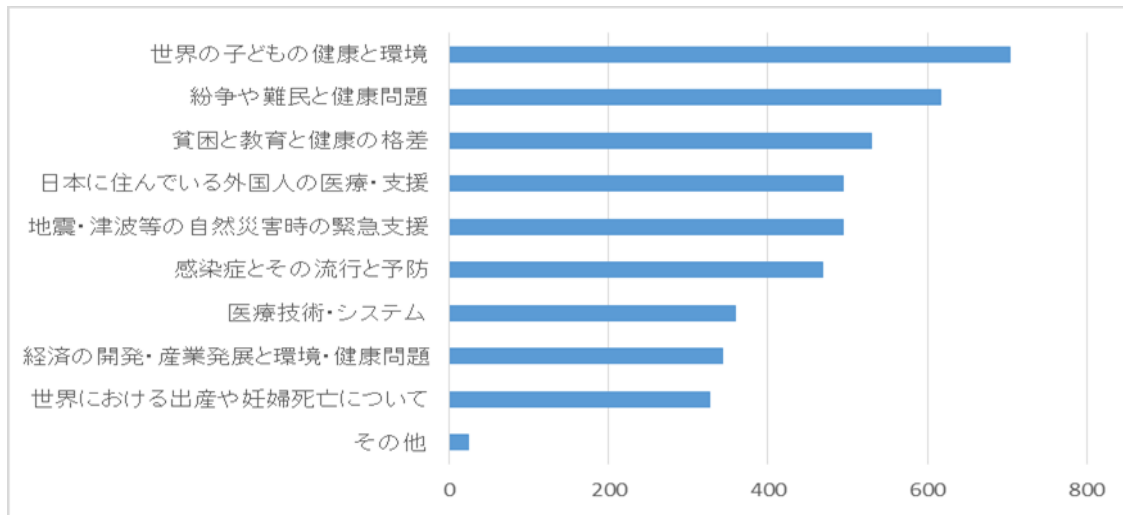


図2 高校生が期待する海外に関する授業内容 (複数回答) N=981

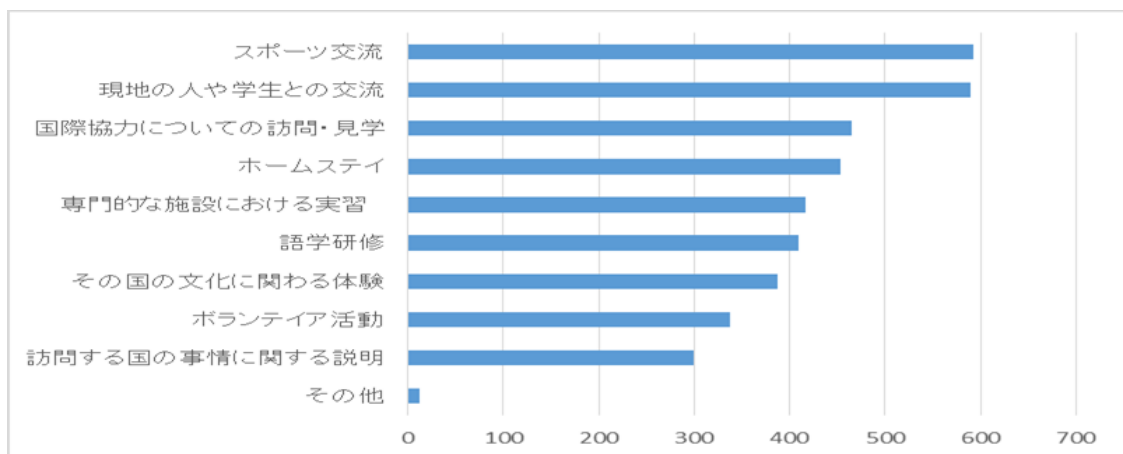


図3 高校生が希望する海外研修の内容 (複数回答) N=981

**Study on development of international nursing education program in south area of
Prefecture A in Tohoku district
-Consciousness survey on high school students' interest in foreign countries and
international activity-**

Abstract

The purpose of this study is to investigate high school students' international experience and their interest in it and clarify what they expect for international activity and international nursing taught through the university education. A self-administered questionnaire survey was performed for a high school in City A in Tohoku district and answers were obtained from 981 students. The rate of the high school students who had experience in living abroad or overseas traveling was approximately 10%. The contents of their international experience were involvement in overseas through sports and club activities and the place where they lived and destination were varied depending on subjects. As for their interest in and expectation for foreign countries, the interest in life and culture was higher than that in international collaboration in foreign countries. Requests for overseas training included exchange through sports, exchange with local people and students, visit and field trip for international collaboration, home-stay and so on. The result has not shown relationships between high school students' experience in foreign countries and their interest in the overseas and wish to participate in overseas training. Moreover, thoughts of high school students including "I want to broaden my view", "I can grow up as a person" and "I want to help someone in trouble" have been clarified. The above results suggests the need to establish an intentional education as an intervention for bringing up future self-images of young people including high school students, which will lead to their international activities and contributions to the society in the future.

Key Words :, International nursing ,International activity, Consciousness survey, high school student